

宮城県 南三陸町歌津地区婦人防火クラブ 岩手県 藤沢町婦人消防協力隊 ヒアリング記録

日 時 2011年10月16日（日）14:00～

場 所 雇用促進住宅（藤沢町） 集会所

参加者 佐藤 ふく子 宮城県・南三陸町歌津地区婦人防火クラブ 会長
阿部 八代子 宮城県・南三陸町歌津地区婦人防火クラブ員
小沢 洋 子 “
千葉 美奈子 “
千葉 とき子 岩手県・藤沢町婦人消防協力隊 会長

1. 背景・概要

宮城県北東部の太平洋に面した南三陸町は、北西方面へ山間地を抜けると、同県気仙沼市の一部を通過して、内陸の岩手県藤沢町（今年9月に一関市と合併）へと辿り着く位置関係にある。

東日本大震災では、藤沢町も建物の被害や停電に見舞われたにも関わらず、婦人消防協力隊のリーダーたちを含む住民が立ち上がり、即日～4日以内に、隣接する気仙沼市本吉地区や南三陸町への物資提供と炊き出しなどの支援を開始している。

また、今回ヒアリングに出席いただいた南三陸町歌津地区の婦人防火クラブのみなさんは、津波で犠牲者を出し、家を流されるなど大変に厳しい状況の中にもありながらも、住民同士の助け合いの先頭に立ち、命と健康を守りつなぐ活動に奔走している。現在、南三陸町歌津地区婦人防火クラブのリーダーのうち幾人かが、藤沢町内に建つ雇用促進住宅で暮らしているため、その集会所で当時のお話を伺った。

ちなみに、宮城県では婦人（女性）防火クラブだが、岩手県では婦人消防協力隊の名称で地域の女性たちによる防火・防災活動が行われている。

南三陸町は、平成17年に歌津町と志津川町が合併して誕生した町で、東は太平洋に面し、リアス式海岸特有の豊かな景観を有する（南三陸金華山国定公園の一角を形成）と同時に、三方を標高300～500mの山に囲まれた、豊かな自然環境を形成している。平成23年2月時点で、人口1万7千666人、5千362世帯が暮らしていたが、東日本大震災では津波の被害を大きく受け、犠牲者は死者564人・行方不明者333人、住宅は全壊が約3100棟にのぼっている。

また藤沢町は、一関市との合併直前の9月1日時点で人口9,123人、2,950世帯が暮らし、従来から住民主体のまちづくりが積極的に行われている。東日本大震災では、人的被害はけが人が数人程度でしたが、公共施設などに大きな被害がでている。

2. 詳細

①それぞれの避難・対応状況

■千葉 とき子 さん（岩手県藤沢町）

藤沢町婦人消防協力隊会長であり、岩手県婦人消防協力隊連絡協議会の会長も務めるほか、藤沢町女性団体連絡協議会会長ならびに、合併以前は町議も務めた。藤沢町も含めて、この一帯では、女性たちはみな全戸加入で婦人消防協力隊の活動をしている。今回は、南三陸町から藤沢町に避難してきているクラブ員が何人かいらっしゃることから、ぜひみなさんのお話を聞いていただきたいと思いお声がけをさせていただいた。

先に藤沢町での様子をお話すると、町内は山間地で津波の被害は無かったものの、社会福祉施設、学校、体育館、プールなど、約15億円の被害を受けていて、いまだ復旧の途中であり、これからという状況。

藤沢市婦人消防協力隊としての活動については、徳田地区婦人消防協力隊が地震直後、地区内の一人暮らしや高齢者のみ世帯について安否確認の声がけをし、集会所ではその日のうちから、高齢者を中心とした避難者に対する2泊3日の炊き出しを実施し、40世帯におにぎりを配るなどした。なお徳田地区では震災当日に南三陸町の歌津地区へ、物資を届けるなどの支援を行っている。また、わたしは3月12日に役場に話をしにいったが、土日なので炊き出しは行政職員で対応する、とのことだったので、町婦人消防協力隊としての取り組みは行わなかった。ただその後、わたしが町役場に支援の協力依頼をしたことがきっかけとなり、町内の自治会や各女性団体の協力のもと、震災から4日目には全町挙げて2トントラック20台分の物資が集まり、2日間にわたって物資を気仙沼市本吉地区へ届け、その後炊き出し支援も実施できた。

詳しくお話するとわたしは3月12日、自分の生まれ育った気仙沼市本吉の大谷地区を目指して車で現地に向かったが、道を誤って大谷鉦山という高台の方へ出てしまい、そこから本吉一帯を見下ろすと、津波で悲惨な状況となっているのがわかり足が震えた。普段なら30分でいけるところを、山伝いに3時間かけ、軽自動車2台がすれ違うのがやっとというような細い道をたどってようやく本吉へたどり着いた。

本吉は大谷地区の仙翁寺へいくと、周辺の約350人が避難していた。自分の実の弟が地区に暮らしていたので、その安否を聞いたかったが、みなさんととてもひどい状況なこともあって聞くに聞けなかった。そしてすぐに引き返し、家中のあらゆる食料や毛布などを積んで、息子と一緒に再び仙翁寺へ向かった。

その日のうちに二回往復したが、二度目は自分の弟の遺体も確認した。ところが、津波で泥だらけの体育館に、ブルーシートでくるまれた状態で置かれているだけで、付き添う人もいない状態。ほかのご遺体もみな、近所の知っている方ばかりだったので、思わず役場に行き、せめて誰か付き添ってやってほしいと必死の思いでうったえた。

そして藤沢町役場に戻り、隣の気仙沼市の本吉地区をどうか助けてほしいと、頭を下げてお願いし、その後、葬儀屋に寄って弟の葬儀のお願いをしてから自宅に戻った。3日目も個人的に避難所へ行って支援を行ったが、4日目に藤沢町も動いてくれ、行政、町自治会協議会、わたしが会長を務める町女性組織連絡協議会の協力の下で町全体によびかけると、2t車20台分の物資が集まったので、本吉地区へみんな運んだ。

ところが物資の集積所になっている本吉地区の体育館へいくと、ただそこへ積んでおくだけの状態となっていた。なぜ配らないのか？と係りの人に聞くと、「人手がないし、行政の人も家族の遺体の確認に言っている」という。「それなら自分たち自身で配りましょう！」と言い、地区内の6か所の避難所に自分たちで物資を届けた。この活動を2日間続けておこない、5日目からは炊き出し支援も開始した。

お風呂のニーズへの対応も行った。震災から10日目に弟の葬儀を藤沢町で行ったが、本吉地区からは友人・知人のみなさんが、残り少ないガソリンを一台のワゴン車に寄せ集めて一緒に乗って駆けつけてくれた。ただ、その方たちはずっとお風呂に入れていないので、ひどい状態だった。そこで再度、町に相談したところ、「まさぼうの湯」という町営温泉を使用できるよう、無料送迎の支援を町として取り組んでくれた。

■佐藤 ふく子 さん（南三陸町歌津地区）

わたしたちが暮らしていた伊里前地区では、西光寺が避難所と指定されているが、地震直後には隣組のみなさんで、車椅子の高齢者などを軽トラックの後ろに乗せるお手伝いをしていたところに津波の第一波が近くまで来た。それを見て夫と一緒にワゴン車で逃げたものの、さらにもっと大きな津波の二波目が迫ってきたので「もっと高いところへ逃げろ！」といわれ、わたしは後ろを見る間もなく必死に運転していたが、チラッと横を見ると、煙をまきながら瓦礫、つまり津波が迫ってきている。もうだめか！と思ったが、細い道が続く高台の地区に逃げ込み、なんとか難を逃れた。

そして、山を越えたところにある石泉（いしづみ）地区の公共施設へたどり着いたが、わたしが最初に来たという状況だった。そこで近所の人に「申し訳ないが避難してくる人がいるだろうから、この集会所をあけてもらえないか？」とお願いしたところ開けてくれ、そこへわたしの地区の人たちがたくさん避難してきた。

この施設は、石泉活性化センターといい、防災拠点としても機能できるよう建設された立派な建物で、この地区ではセンターを拠点に防災訓練を行い、水も備蓄していたので、わたしたちもたいへん助かった。

少しして、親族が気になったので歌津中学校に探しにいくと、園児・小学生・中学生と住民がたくさん避難しており、たいへんな生活状況の中、呆然と沖を見ている人もいるような状況。そして親族をセンターに連れて戻ってきてから、この11日の夕方より炊き出しを開始した。

すでに100人以上が集会所にいたが、ガスもプロパンだったためすぐに使え、水は沢水が利用できた。また役場から、お米は提供するので、他の避難所への炊き出しも一緒に行ってほしいと言われ、みんなにいきわたるよにということで小さめのおにぎりになったが、1日1200個のおにぎりを、夕食用に4日間作った。

お米のとき汁や食器を洗って出た水はトイレ用にとっておき、それを使って流すようにした。

ずいぶんあとから衛生指導が入ったが、それは志津川のほうの避難所でノロウィルスが発生したためだった。わたしたちの避難所では、水も使えたし、管理もしていたので、そういう感染症などは起こらなかった。

電気は停電でずっとつかなかったが、発電機を貸してもらうことができ、そのガソリン代は全世帯で割ってお金を出し合った。そこで電気は6時～8時の間つけることとし、その間携帯電話の充電もみんなで行った。夕ご飯を食べるとあとは寝るしかない。

避難所生活ももうすぐ一ヶ月になるかというころ、南三陸町長より、避難所をどこどこに用意しているので、との連絡が入り、そこで自立していかねば、という気持ちになった。

実は夫が藤沢町出身ということもあり、藤沢町でお世話になるしかないと言う気持ちから、ツテをたどってお願いすると、いまいるこの雇用促進住宅をお世話してもらえた。その後、何回か募集があり、いまは歌津から19世帯が入居している。他の地域から入ってきている人もおり、全部で50世帯は暮らしていると思う。

■阿部 八代子 さん（南三陸町歌津地区）

当日は気仙沼に用事できていたが、車で帰る途中で地震にみまわれ、ラジオをつけると津波がくるという。大きな木もどたどたと倒れており、これは普通でないに家に懸命に走らせた。しかし液状化がひどいことになっていたので、これはとんでもないことになる予感し、一度自宅に戻ってから、必死で山へ逃げた。自宅は建てて1年と5ヶ月だった。父はどうしても家に残るといって意思が変わらないので、仕方なく老犬を連れて逃げたが、それでもよもや自宅まで津波がくるとは思えなかった、というのがその時の気持ちである。

山側わたしたちの地域は遠いので、避難所は歌津中学校には指定されていなかった。それで、石泉活性化センターに避難したが、周辺の地区の方たちがいろいろな食材や調味料を提供してくれたので、本当にありがたかった。わたしたちは、朝・昼・晩と炊き出しを行い、暖房もあったので初日から暖かいものを食べることができ、こごえる思いはせずにすんだが、歌津中学校ではしばらく1日1食の状態で厳しかったという。

ただ、日が経つと、他地区ではお肉を食べたとかいろいろなうわさ話が入ってきた。大きい避難所とそうでないところで、格差が生まれた。センターは当初、「ここは指定の避難所ではないから」と、市としての支援はなく、油ものもほとんどとれなかった。集落のひとのおかげでいろいろと差し入れていただいて、初日から食事にことかかなかったので、それは本当にありがたい。3〜4日過ぎて、「下着が必要だ」と思い立ち、近所の方たちに「着古していいから下着をもらえませんか？」とお願いするなどして対処した。とにかく「泣いてられない、これからだ」、という思いで必死に動いた。

お風呂に入れず、髪は20日間洗うことができなかったが、病気にはならずにすんだ。

■小沢 洋子さん（南三陸町歌津地区）

わたしの家は、地区の避難所にもなっていた西光寺というお寺であるが、よもやここまで津波が来るとは思ってもいなかった。敷地に避難してきた地域の方たちと一緒にいて、津波の第一波をみてこれは危ないと、裏山の道をみなさんと一緒に必死に登っていたときに第二波が来て、それで寺の庫裏もみな流されたという。わたしは必死に逃げたのでその様子を見ていない。わたしたちが立っていた敷地の場所もみな波にさらわれたので、あのままその場にいたら津波にのまれていた。

他に頼れるところがあるなら、避難所ですっとお世話になるよりは、みなさんのためにも出たほうが良いと言う考えから、津波が100mほど手前で止まって被害を免れた親族の家にお世話になったが、ひとつの家に23人も寄せてもらっていたのでたいへんだった。

夫が内陸の知り合いのお寺からまとまったお金を借りて、みんなの下着から食材、食器など生活道具を買うと、あっという間に数十万円使ってしまった。しかし外部からの支援はない。小さいお鍋でなんとかご飯を炊いて、ガスがなくなったらこんどは七厘と炭を買ってきてそれで炊いてと、とてもたいへんだった。多少なりとも支援がくるようになったのはだいぶあとのことだった。

■千葉 美奈子さん（南三陸町歌津地区）

わたしは歌津中学校に逃げたが、はじめは500〜600人ぐらいのひとが避難していた。全ての人が津波被害で逃げてきたというわけではなかった。しかし校舎のガラスがみな割れて散乱していたので土足で入り、みんなでカーテンをはずしてそれを床のガラスの破片の上に敷き、毛布一枚を5・6人で引っ張り合って寝た。割れた窓から外気がそのまま入ってきて、本当に寒かった。

この中学校の体育館は、1階が道場で2階が体育館という作りだったので、1階を物資の集積場

所にして、2階を生活の場にした。

2日目に小さいおにぎりが配られて、本当にありがたくかみ締めたが、だれが作ってくれたんだろうと思った。あとから、被災したみなさんが炊き出してくださったと聞いて本当に驚いた。水は軽トラックで男性たちが山に行き、湧き水をタンクで汲んできてくれていた。

トイレはたいへんだった。2階の女子トイレは使えない状態だったので、男子トイレを女性も使った。バケツに水を入れてトイレにおき、おしっこそのときはそのまま、大便をしたらバケツで流す、と言う形をとっていたが、だんだん2階が詰まるようになったので、1階で用を足すようにし、やがて仮設のトイレが設置されたので、昼間はできるだけ外の仮設トイレを使うようにしてもらった。子どもたちはみな静かにして過ごしていた。

また、3週間目くらいにようやく味噌汁を炊いた。はじめは外部から支援をもらうばかりだったが、自分たちで汁物を作りたいと、物理室を借りた。小学校・中学校の食器を集めたが足りず、湯飲みも使って汁物を配った。一人お玉にいっぱいずつだったが、とても喜んでもらった。家が残って在宅で避難生活を送っている方たちも生活状況が厳しいことはわかってはいたが、お味噌とお塩があれば、お願いして頂いてきて使った。

②全般（個別課題や婦防としての活動状況など）

■避難所運営・避難生活に関して

◎リーダーの決め方

避難所のリーダーは誰が担ったのかについて伺ったところ、石泉活性化センターでは、特にリーダーは立てなかったが、婦人防火クラブ会長の佐藤さんと、消防団の男性の1人が常駐する形で外部に対応している。また、気仙沼市本吉地区の仙翁寺では、区長・自治会長さんがリーダーに、歌津中学校では、上区・下区の区長さんがそれぞれリーダーになっている。

◎炊き出しについて

*津波被害により、普段訓練に使っていた炊き出し用の釜なども流されてしまったケースがあった。たとえば、以前は高台の施設に上げてあった釜が、いつ頃からか低地のほうで使ってそのままそのエリアで保管していたため、今回の津波で流されてしまったというものもあった。

*周辺に農家や酪農家がある場合、お米や野菜などの提供が重要な支援となったことが今回の話でも明らかになった。石泉活性化センターではお米や野菜のほか、物流がストップして牛乳を出荷できない酪農家が、支援物資として牛乳を提供してくれたので、それを沸して飲んだという。

*各家庭の貯蔵用の冷凍庫に入った肉などを、「解けてしまいもったいないから」と言って届けてくれた近隣の人も多くいたという。

*なおLPガス地域のため煮炊きのためのエネルギーはすぐに調達できているが、お米については味が落ちないように玄米で貯蔵しているケースがほとんどのため、停電で精米ができずに困った時期もあったという。

*水については、自家水道の方から頂いたり、湧き水をつかったりしている。また、仕方なく川で洗濯をしてしのいでいる。

◎その他

*津波の被害がなく、電柱が残った地域は4月15～16日ぐらいに復旧した。藤沢町では4日目には復旧。

*仮設住宅は7月になってから入居が始まった。

*それぞれの避難所で、大工さんなど技術を持った被災者が、トイレを作ったりするなど環境改善に力を発揮している。とはいえ、外のトイレは夜が怖くてとても使えなかったという。

*家族との安否が早く取れたひとと、数日かかった人がおり、安否が取れるまでは落ち着かない状況であったことが分かる。

3. 今後に向けてとメッセージ

■各地域の婦人消防協力隊・婦人防火クラブの取り組みと組織の今後等について

○災害直後の活動の評価

*地震と津波の直後は、組織としてどうのと言っている状態ではなかったという発言があいついだが、むしろ、隊員・クラブ員はみな、その場その時のとっさの主体的な判断で、それぞれに率先して最大限なすべきこと・できることに果敢に取り組んだといえ、それが多くの人の命と健康を守りつなぐことに貢献したと評価できる。

*また、避難生活においては、日常の活動を通じた連携関係が大いに発揮されており、組織の存在そのものの重要が理解される。

○南三陸町の婦人防火クラブの活動について

*今回ヒアリングに参加いただいた皆さんの地区では、婦人防火クラブは全戸加入であり、何年かおきに役員をやるというスタイルで、いままで活動してきている。

*炊き出し訓練なども継続して行ってきており、今回、それらが無駄ではなかったと改めて感じた、との感想が聞かれた。

*クラブの年間の活動としては、6月に総会で、年に3回程度消防団の訓練にあわせて訓練を実施している。冬は毎晩拍子木で防火啓発を行っている地区もある。

*伊里前地区では、3月12日が自主防災組織の会議予定だったが、議題は高齢者の避難対応だった。そうした形で、継続的に地域防災活動に参画していたことから、当日も外に出て活動していて、津波の動きが分かったため助かった、と感じているクラブ員もいた。

*ただし、南三陸町婦人防火クラブでは町全体の会長が津波により亡くなっている上、クラブ員が皆ばらばらなので、他の地域組織と同様に、とりあえずは活動は休止せざるをえない状況であるという。

*藤沢町の雇用促進住宅での暮らしについては、スーパーも病院もあり環境はとてもよいが、南三陸町の避難施設ではないということで支援はもらえず、藤沢町、現在は一関市にお世話になっている形になっているという。ここから毎日、南三陸町などへ通って仕事をしているひとも多い。

○藤沢町婦人消防協力隊の活動について

藤沢町では婦人消防協力隊として、年間200円の会費をもらっており、3年に一回ずつ隊員となって活動してもらおう形をとっているという。

■メッセージ

○私たちはみな、どこで津波に遭うかわからないので、「地震→津波→避難!!」を常に念頭に置くようにしていただければと思う。

○「津波てんでんこ」の教えの通り、家族を思うことももちろん大切だが、命も大切である。

○懐中電灯と非常持ち出し袋は、常に常備してほしい。

○気仙沼ではお年寄りから津波の怖さを叩き込まれて育った人が多いが、やはり防災については子どもたちに小さいころからしっかり伝えていくことが不可欠だと思う。

○岩手県婦人消防協力隊連絡協議会として、県内からの義援金と日本防火協会に集まった全国からの義援金を合わせて、それを12市町村の団体に3日間かけてお届けするという取り組みを行った。全国のみなさまに本当に感謝しています。

(以上)